「父は出兵、母子で戦火をくぐりぬけて」

青木　明美　（８０歳）

太平洋戦争が勃発した 1941 年、父に赤紙召集令状が届き、1 歳の私に赤い靴を買ってはかせて、喜んでヨチヨチ歩いている姿を見ながら出兵していったと、戦後母が語ってくれました。父の父親は、息子が天王寺の部隊にいると思って、1 週間毎日お弁当の差し入れを持って門前に立っていましたがすでに釜山に出兵しており、その父親も 2 年後息子に会えないまま病死しました。

1945 年、母は大阪が空襲になると聞き、大慌てで大阪市此花区の家から手荷物をまとめ 5 歳の私を連れて、天保山の船に乗り込みました。疎開先は母の実家今治市。船は鈴なりに人々と荷物がごった返し、今にも沈みそうな気配に、恐怖心が沸き起こったのを記憶しています。

母の実家に着いて余り日が経っていない夜中、突然の警報にたたき起こされました。籐（とう）の乳母車に衣類と貴重品を山盛り乗せて、母の両親と 4 人で山の方向へ一目散に走りました。何キロ走ったか分かりませんが親戚の家に荷物を置き、畑に掘ってある防空壕に飛び込みました。中には 10 人くらい居たでしょうか。

B29 の爆音がだんだん近づき、爆弾の破裂音やパチパチ燃える音がはっきり聞こえて、生きた気持がしませんでした。「あっ、入り口が燃えている。みんな今

のうちに出ろ!」と男の人の声。燃えている四角い入り口を、やっと一人ずつ這い出し、私は母と手をつないで、田の畦道に身を伏せました。この時、母の両親とはぐれてしまいました。母は急いで私をおんぶし、毛布をかぶって、赤い空から雨の様に落ちてくる焼夷弾を避けながら、田んぼを這いまわりやっと道路にたどり着くと、両端は草がメラメラ燃えていました。

狂ったように、牛や馬が暴走し身の危険を感じました。人家は火の海、あたりは煙で見通しが悪く足の裏が熱いと思った時は裸足でした。田んぼの水で濡れた毛布を捨て、やっと山の際にたどり着き、横穴式の防空壕に入りました。中に8人くらいいて、私と似た年代の子も2人いました。

足元は水浸しで、みんな缶の上か、台の上に腰をかけていました。譲ってもらった台の上に、母と私は素足のまま腰をかけ、いつ終わるか分からない空襲が過ぎるのをじっと待ちました。夜が明けて、外に出ても大丈夫のような雰囲気が伝わり、恐る恐る出ると、家が焼けた黒焦げの山や、あちこち火が燃え残っていたり、田や畑は、焼夷弾がいっぱい突き刺さっていて、あたりは別世界になっていました。

お腹がすいていたので、親戚の家に行くと、半分焼けて幽霊屋敷のようになっていましたが、荷物は幸い無事でした。部屋の隅でおにぎりを食べていたら飛行機の音が近づいてくるのがわかり、逃げようかと立ったまま釘付けになり真っ

青になりました。息をこらしていると爆音が頭上を通過し、音はだんだん小さくなって消えました。ほっとしたとき「焼けた様子を偵察にきたんや」と親戚の人が言いました。

その後、夜になると、夜空の遠い方向であちらこちら薄赤色になって、空襲を受けているようでした。何日経ったか覚えていませんが、広島に大きな爆弾が落とされたと噂が広まりました。終戦後、半分焼け残った家に、4家族がしばらく住みました。母は着物、帯、貴金属を持って農家に行き、お米、味噌、醤油、食物にほとんど変えて、最後は着物数枚しか残っていなかったのが子ども心に焼き付いていました。

母は夫の無事を祈りながら、ひたすら「生きる」ことに必死だったと思います。戦後の食糧難は、言葉に言い表せない生活でした。かぼちゃ、芋、粟、麦、野菜の茎、外米を食べ、時々母が小麦粉で洋食焼きといって、塩や醤油で味付けした主食が美味しかったのを覚えています。配給の黒いパンは、つなぎにワラ?のようなものが入っており、半分食べて、こっそり捨てました。

父は、私が小学校入学の直前に、帰ってきました。激戦地ニューギニアへ衛生兵として出兵し、2,000人部隊の生き残り5人の一人でした。戦地でマラリアに罹り、日本に帰っても東京の野戦病院に入院し、家族に連絡が取れるまで二年近くかかって、今治に私たちが住んでいることが判明しました。私は、いつまでも

「知らないおじさん」と父を呼んでいましたが、美味しいビスケットをくれた味が父との距離を近づけました。弟や妹も生まれましたが、父はマラリア病で年に何回となく40度の熱が出て、黄色のキニーネの薬を飲んでは何とかおさまりました。高熱が出るたびに、このまま死んでしまうのではないかといつも不安でした。

定職にもつけず、一時は生活保護を受けていた時もあり、戦前と戦後の余りにも変貌した生活に、母も投げやりな言葉を何度も言いました。私が小学校高学年になった時、戦地の様子を、父は「犠牲者が出たら、敵機がいても負傷した味方を助け、谷へ水を汲みに行っている間に、部隊が敵の攻撃を受けて全員死亡した。」「天皇陛下バンザイ」「お母さーん」「お父さーん」そして妻の名を呼んで死んでいった兵隊の話を、淡々と喋ってくれました。ニューギニアの夜空は、星に手が届きそうなくらいに澄み切って、南十字星が、何と綺麗だったことかと何回も言いました。「人の幸せを奪うのが戦争、人間を悪魔に変えてしまう戦争は、二度と起こしてはいけない。」と私に何度も言い聞かせました。戦地では肌身離さず持っていた私の幼い写真を見ては、生きて帰ると自分に言い聞かせたと言った時、私は胸がジーンと熱くなりました。

戦後45年、父は初めて私が住んでいた大阪府枚方市に来ることができ、昔住んでいた大阪市内の地域を案内したら、子どものようにはしゃいでいました。当

時、民放テレビで「ニューギニアに散った16万の青春」と放映されていましたが、父は数少ない生き残り兵でした。その後、戦友同士で音信を頼って集まり、反戦の思いを込めた記録集として、「地獄を見た一兵士のニューギニア戦」を出版しました。文章の一部に、激しい腹痛に苦しんでいる一兵士に、応急処置として、父が外傷薬のリバーノールを飲ませて一命を取り止め、感謝の気持ちを綴った文章が載っていました。その父も、マラリア病からやっと解放されて70歳になった時、脳梗塞になり、認知症も出てきました。病院へ見舞に行った時は、「自分の父親がお弁当を持って、毎日天王寺の部隊の門前に来ていた。」と言って、一人息子だった父は泣いていました。

青春時代も人生も、戦争で破壊された父や母の一生を思うとき、21 世紀は憲法9条を守り、日本と世界の平和が脅かされないよう、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語る事が大事だと思います。

戦後、文部省が中学教科書として作った「新しい憲法のはなし」は2年位で廃刊。それを平和委員会がパンフレットにしたものを52年前手にして感動しました。数冊買い求め、友達や子どもや孫にも渡して話をしたものです。「9 条があるから今まで戦争にならなかったのよ」と。

今戦争を知らない世代が増えている中、私は人生すべてをかけて積極的に語り継いでいかねばと思っています。